

尊王攘夷、開国から大政奉還

はじめに

「アメリカ人と仲良くしなければならぬと誰が決めたんだ。こっちが頼んだ訳でもないのにあの黒船が浦賀にやって来て、徳川300年天下泰平の夢を破られたんだ。向こうが無理やりやって来て、大きな大砲でズドンと脅かして、無理やり仲良くしよう。そんな馬鹿な話があるか。」
と寅さんのせりふ。「そうすると寅さんは尊王攘夷派か」とタコ社長。「そうだよ」と寅さん。

これは渥美清演じる「男はつらいよ一寅次郎春の夢」(第24作)の一場面で、アメリカ人のマイケルが寅屋に下宿することに反対する寅さんのせりふです。

この寅さんの気持ちが、江戸時代の当時の日本人の上から下まで、武家、公家、百姓、町人のすべて気持ちであったのです。

日本で広まった大きな思想は宗教も含めて江戸時代まで仏教、神道、儒教です。三教と言います。

これ以外の思想としては「尊王攘夷」思想がもっとも有名です。幕末この思想に影響された志士たちが暴れ大騒動となりました。結局、徳川幕府は倒されましたが、幕府の開国路線は継承され明治政府が樹立されます。

徳川幕府は、この「尊王攘夷」の思想によって倒されたのでしょうか。これを振り返ってみたいと思います。

ここで言葉の問題でお話しておかねばならないことがあります。

先ず「幕末」です。徳川幕府の末期の時期ですね。「幕末」表現は明治になっ使われるようになった言葉です。

実は江戸時代に「幕府」の言葉はありましたが、一部の学者では使われていただけで、ほとんど一般では使われていませんでした。徳川政権は自分達を幕府と言いません。臣下も百姓・町民も「幕府」とは呼びません。みんな御公儀もしくは大公儀と言いました

古代では征夷大將軍が野営した折、幕を張った本部の意味です。

鎌倉時代は、「幕府」は頼朝の官邸のことでした。足利將軍家も徳川將軍家も自身で「幕府」の言葉は使いませんでした。足利將軍家は自分の政権を「武家」

と呼ばせ、徳川将軍家は上記の通り「御公儀」と呼ばせました。

次に「徳川幕藩制度」(明治に作られた学術用語)の「藩」です。この言葉も当時学者の言葉として“藩屏”(皇室や将軍家を守る)等の使用例はありましたが、公用語ではありませんし、一般人も使いませんでした。「藩」が公用語として認知されたのは明治に入ってからです。正式に認知したのは御公儀(幕府)ではなく、明治政府でした。そうしなければ廃藩置県令が出せません。

そもそもいつから使われ始めたのか、幕末、京都の尊王攘夷の志士間で使われ始めました。互いに貴藩とか尊藩とか言い合いました。(一説によると長州の志士が使いはじめたとのこと。吉田松陰は使っています。)

ただこの「幕府」、「幕末」、「藩」も今日もう使い慣れた便利な表現ですので以後ここでもつかいます。

又「鎖国」も江戸時代はあまり使われませんでした。江戸時代は一般的には「海禁」と言っていました。

しかしこれも又、今日の一般表現である「鎖国」で表記します。

(1) 「尊王攘夷」はだれが考え出したのか

これは尊王と攘夷の二つの言葉の合成語です。水戸の藩主徳川斉昭が著した「弘道館記」の中で記したのが初出です。「弘道館記」は藩校弘道館の建学の綱領を記したものです。(1838年(天保9))

しかし尊王と攘夷の言葉は以前からあります。両方とも中国から出ています。

先ず尊王です。尊皇とも表します。勤王とも言います。帝王を尊ぶ精神です。日本では天皇を敬うことになりませんが、徳川幕藩制度の下では天皇と将軍がいます。どちらのことになるか。17～18世紀かけての儒学者・政治家の新井白石がまとめました。将軍は天皇に委任されて政(まつりごと)を行う。将軍は天皇を敬い、将軍の家臣は将軍を敬う。この論理で尊王をまとめました。この論理は江戸中期から幕末の一定時期までほとんど日本人が納得していました。(徳川家康は武力で天下を取り、実力で将軍の地位を勝ち取ったのですからね。委任を受けたなんて徳川幕府が勝手に言っているんです。しかしこういわないと実質天下を統治している将軍の立場がありません)

次に攘夷です。

夷を討つ事ですが、中国では古来より自国を華と言ひ、周辺の国々を

(北) 狄、(東) 夷、(南) 蛮、(西) 戎 とさげすんで呼んでいました。これ

を華夷思想と呼びましたが、日本も自国を華として外国を夷と称しました。

中国をまねたのです。

これより日本では、攘夷とは外敵を打ち払って入国させないこと、外国とは通交しないことの意味で使われるようになりました。よって攘夷思想派は開国反対で、鎖国を続けることを主張した人々です。

江戸時代、日本人はみんな鎖国賛成で攘夷思想でした。

しかし幕末になってみんなだんだん開国派に変わって行きます。思想の転向と言って良いでしょう。

最初に変ったのが、幕閣、有力大名（島津斉彬、松平春嶽、山内容堂等）、及び開明派の志士（坂本竜馬等）で、逆に開国への転身が遅かったのが長州とこれに乗っていた諸藩の脱藩浪士たちです。このため開国派の幕府と攘夷派の長州&水戸等の脱藩浪士との間で江戸や京都で激しく暗殺、殺戮を繰り返します。

一方尊王攘夷の仕掛け人である水戸の藩主徳川斉昭は亡くなり（1860年）、その側近の学者たちは開国派に転向します。

水戸は攘夷と開国に分かれ、政治的には力を無くします。

そして長州が開国に変ったところで（1864年頃）、薩摩、土佐の開国派の有力者（薩摩の西郷隆盛・大久保、長州の桂小五郎、土佐の後藤象二郎）が密約をして討幕するのです。

この間、朝廷の公卿ももとは長州に取り込まれ、攘夷派でしたが、京より長州が排除された後は開国派になりました（1863年）。長州より早く開国に変わりました。

結局みんな早かれ遅かれ開国に変わりますが、時期が違うだけで、殺戮、暗殺が幕末の時期に続きます。

それでは討幕は誰がいつからの発想でしょうか。

幕末もその初めの頃は誰も徳川幕府の幕閣（老中）を非難しても、長州を含めて攘夷論者も討幕など考えていませんでした。徳川幕府を倒して自分が取って変わるなど思う大名もその家臣もいません。なんのくんのと言って幕閣を批判しても徳川家を取って代わって自分が將軍になるなど考えられません。

又幕藩制度をなくすなど大名の家臣である侍は自分の藩を無くすことで、自分の殿様を否定することです。先祖代々殿様に仕えてきたこの封建制度をなくす考えなど普通の侍にあるわけがありません。

討幕を最初に考えたのはやはり薩摩の西郷でしょう。徳川幕藩制度を止め、

中央集権制度への移行を考えたのは、1862年国父と言われた島津久光から幽閉を許されてからでしょう（幽閉中に考えていたかもしれません）。

久光の兄で西郷の師匠的存在である前藩主斉彬（なりあきら）は、公武合体の考えで、幕府（徳川家）に協力します。従って斉彬が生存中は、討幕など考えなかったでしょう。

彼が薩摩や長州や土佐の開明派志士に働きかけ、そして彼等が藩主には知らせず討幕の密約をし、朝廷の公卿を引き込み、策略を既成事実として倒幕を実行したものです。

（2）尊王攘夷から大政奉還へのいきさつ

幕末の時期とは徳川幕府の末期のことですが、普通は1853年（嘉永6年）のアメリカ東インド艦隊提督ペリー来航以降明治政府樹立前の1868年（明治元）ごろの期間となります。

徳川幕府が滅亡し、大政奉還、王政復古となったのが1867年（慶応3）で、鳥羽伏見の戦いで幕府軍が敗れるのが1868年（明治元）ですから約15年の間となります・

歴史的には短い間ですが、この間の革命的政治の動きや尊王攘夷から開国へ、討幕へと思想の変化が激しいことから四時期に分けて話を進めたいと思います。

即ち①18世紀中頃よりペリー来航（1853年（嘉永6））以前まで ②ペリー来航（1853年（嘉永6））より日米修好通商条約締結（1858年（寛政5））以前まで。③日米修好通商条約（1858年（寛政5））より薩長連合盟約（1866年（慶応2））以前まで ④薩長連合（1866年（慶応3））より鳥羽伏見の戦い（1868年（明治元））の四つの期間に分けます。

①18世紀中頃よりペリー来航（1853年（嘉永6））以前まで

この頃はいわゆる未だ鎖国の時代です。

なぜ徳川幕府は鎖国政策を取ったかです。豊臣秀吉はキリスト教（耶蘇教）を禁教にしました。この理由は、キリスト教が日本の神仏との共存に無理がある、ポルトガル宣教師の強引な布教に反発、更に南米でスペインと宣教師とが一体になって国を略奪した行為を知ったこととされています。

徳川政権はキリスト教の禁教政策を引き継ぎ、強化すると共に日本人の海外渡航を禁じ、貿易は長崎でオランダ、中国と朝鮮とのみに限定しまし

た。これを鎖国と言います。当時は海禁と言いました。三代将軍家光の時に鎖国政策は完成しました。

この幕府の鎖国政策は、キリスト教禁教の理由は秀吉と同じですが、外国との通交や貿易を禁じたのは、貿易や通交により大名や商人の勢力の拡大を恐れたからです。貿易や海外情報の果実は幕府だけが得るのです。

この体制がアメリカのペリー提督来航まで続くのですが、18世紀後半からロシア、イギリス、アメリカやフランス等が毎年のように蝦夷地、長崎、浦賀に入港して薪、水の補給、更に通商を求めるようになりました。

幕府は断固これを認めません。鎖国の維持です。そしてロシアの進出を防ぐために蝦夷地の防御に力を入れます。松前藩を幕府直轄地とします（1799年）、伊能忠敬蝦夷地測量（1800年）、間宮林蔵樺太探検（1808年）が行われます。

水戸徳川家臣で学者の会沢正志斎が「新論」（1825年）を著し、尊王での日本国体維持、海禁（鎖国）の続行と海防の重大さを説きました。

「尊王攘夷」の言葉は後に水戸藩主徳川斉昭によって表わされましたが、この「新論」は「尊王攘夷」の理論を打ち立てたものとして、高い評価を得ました。後期水戸学の真髄として幕末尊王攘夷の志士たちのバイブルのような著書となりました。（前期水戸学とは水戸光圀が始めた大日本史編纂の事業です）

一方、西洋の科学技術の進歩を蘭学より知り、異国船打払い令に反対し、外国事情を上申しようとしたインテリ―達がありました。

この人達が渡辺崋山、高野長英、小関三英らで、お上の政策にたてつく輩として逮捕、入獄、切腹となりました。これが蛮者の獄です（蛮者は蛮学社中の略で、蛮学は南蛮の学問でしょう）。1839年（天保10）のことで、この頃は、幕府老中（天保の改革の水野忠邦時代）への批判がましきことや勝手に幕府に建白することは厳禁の時代です。老中政治が絶対の頃です。

彼等は外国を夷狄として排除することは外国事情から好ましくないこと、そして西洋技術による国防を提案していました。（ペリー来航の14年前です）

内容はともかくとしてお上に意見するとは何事かで罰せられたのです。

このあたりの時代は、日本中で飢饉による一揆や騒動が頻発し、幕府の権力に陰りが出てきており、幕閣老中は威信の維持にやっきになっていた時期です。故に強硬に弾圧したのです。

我々が知っている通り彼らの考え方は彼らの処罰後、幕府は必然的に実行せざるを得ないこととなります。

ここでアヘン戦争（1840～42年）が起こり、清国が大敗した情報が日本に入りました。

いよいよ海防に注力しなければなりません。各藩に通達を出します。洋式の軍備の必要性が言われるようになりました。

一方、たび重なる外国船の来航で、その要望により、外国船に薪水の給与を許可しました（1842年）。しかし幕府は開国の意思はありません。

オランダ国王から開国の進言がり（1844年）、そしてオランダの東インド総督より、アメリカの使節が来航して開港を要求することを予告してきました（1852年）ペリー来航の1年前です。

一方、8代将軍吉宗没後の18世紀中頃より、旱魃、不作、飢饉により一揆、打ちこわしや暴動（大塩平八郎の変 1837年）等の騒動が国内あちこち頻発し、その対策で松平定信の寛政の改革（1787年）、水野忠邦の天保の改革（1841年）が行われましたが、経済状態は良くなりません。いわゆる内憂外患の時代に入って行ったのです。徳川政権の幕府の統率力に陰りが出てきました。

鎖国政策（前述）は当時、公家も武家もインテリーを含めて国民の皆が古よりの国是と思っていたのです。

幕府だけが、一定の国と一定の場所（長崎出島）で交易をおこない、その他の国民には交易させない、そして海外渡航を禁じたのは、実質的には江戸時代しかありません。（幕府の交易のおこぼれのような物は一部の大名は得ていました）

平安時代も、鎌倉時代も中国の政府間で正式の通交がなかった時代はありましたが、その間も民間の貿易、往来は自由だったのです。

そんなことは知らぬと、江戸時代の18世紀ごろ以降、鎖国派は日本の国是と皆思っていましたし、学者もその鎖国の正当性の理論を開陳しました。

②ペリー来航（1853年）より、日米修好通商条約締結（1858年（安政5））前まで

いよいよかの有名なアメリカ使節ペリーが久里浜（浦賀）にやって来ました。

これがはじめに述べました寅さんの一節となるのです。

上述のように事前にオランダから幕府に連絡がありましたから実際は、寅さんの言う様にいきなりではないので、幕府首脳はそんなに驚かなかったでしょう。

江戸の民衆は驚きました。特に蒸気機関で動く外輪船にはびっくりしました。

幕府は結局アメリカ大統領フィルモアの国書を受領して将軍家慶（12代）が病気であるとして返事を来年するとして一旦帰ってもらいました。1853年（嘉永6）6月3～12日の滞泊でした。

家慶将軍は本当に病気でした。6月22日に亡くなり、病弱の家定が13代将軍に就任します。

さて筆頭老中の阿部正弘は国書（開港要求）を在府中の諸大名や旗本に諮りました。

徳川幕府が政策を決めるのに大名に意見を聞くなどは前代未聞です。政治は将軍から老中に委任されていたのが慣例で実体です。徳川幕府は所謂老中政治なのです。老中の衆議で決めるのですが、老中筆頭、又は大老の権限は大きいのです。

これで分かるように幕府はこの頃は統治力に衰えを見せて来ており、老中だけで決める自信がなくなっていたのです。

そして水戸藩主の徳川斉昭を海防参与に任命しました。従来は、御三家（尾張、紀伊、水戸徳川家）は幕府の政治に干渉しないのが慣例です。しかしもう老中だけでは決められなくなって来ていました。精鋭の学者勢を抱え、幕府老中政治の野党化した斉昭を取り込まないと収まらなくなっていました。

品川にお台場築造を着手し、オランダに軍艦を発注しました。

さて翌年の1854年（安政元）、ペリーは返事を求めてやってきました。2月10日横浜で交渉を開始し、3月3日米和親条約があっさり成立したのです。

この条約の中味は、従来既に認めていた薪水給与の延長線の取り組みで、条約締結の当座は関係者初め、一般人にはさしたる動揺はありませんでした。速やかに締結されてしまったのです。

未だ尊王攘夷の志士の登場はほとんどありません。

しかし、水戸藩主の徳川斉昭は怒りました。攘夷の政策に反するとして、そして幕府参与を辞任してしまいます。

ところで昔のお殿様は、自分の言うことが通らないと役職を直ぐに辞任してしまいます。役職に残って説得を試みたり反対派を募ったりの行動にはでません。今の政治家と違います。お殿様が御殿の所以である所ですかね。

寅さんのせりふで“大きな大砲でズドンと脅かして”ですが、この大砲は確かにアメリカ軍艦から打たれました。しかしこれは空砲で、幕府には事前にアメリカの記念日故空砲を打たしてもらいたいと申し出があり、幕府が許可したものです。民衆も初めは驚きましたが、事情が分かり、かえって面白かったそうです。

この大砲におびえて、幕府が条約を調印したとの事はありません。

続いて英、露とも和親条約を結びました。

これで日本は鎖国を止めて開港したとは言えないでしょう。和親条約は海上での遭難の対応や薪水の給与のことで、通交とは言えません。

アメリカ初め各国は当然この後通商を求めてきます。オランダからこのままでは日本は世界を敵に回し、孤立してしまうと進言があります。

一方、海防の為の大砲製造、軍艦の調達や建造、製鉄の技術は、オランダからだけの技術輸入だけでは無理で、先進の西洋諸国から輸入しないと西洋に追いつかないと幕府首脳は実感していました。

これに反し水戸の斉昭とそのブレーンの学者（藤田東湖、会沢正志斎等）は開国を認めません。攘夷思想なのです。攘夷思想とはこの時代は開国反田派のことです。

この水戸派の尊王攘夷思想は全国に広まって行きます。会沢正志斎の「新論」がバイブルです。この本の原文は全て漢文です。その後仮名本も出版されるようになりました。みんな読めるようになりました。尊王攘夷志士が全国に誕生していきます。

アメリカ総領事ハリスが通商条約の必要性を江戸城で説いたのが1857年（安政4年）の10月21日で、家定将軍と幕閣が諸大名を招集して通商やむを得ないと説明したのが、同月29日です。諸大名の中には反対意見もあったのですが、却下されました。そして京都の天皇に勅許を仰いだのです。

勅許とは天皇の許可書をもろうことです、朝廷の許可を貰うことです。

天皇（朝廷に）に政策について許可をもろうことなど家康以来ありませ

ん。そもそも鎖国政策は幕府が決めたことであり、止めるのになんで許可が必要なのか変ですね。

もう幕閣は自分たちだけで重要政策を決める自信がなくなっていたのです。

天皇のお墨付きで大名初め皆を納得させようと思っていたのです。

この通商条約の勅許を待っている間に、幕閣は老中に新たに井伊直弼（彦根藩の藩主）を任命し、筆頭老中（後に大老）としました。（1858年4月23日（安政5））

もちろんこの人は開国派です。通商条約調印のため幕閣は強力なリーダーを求めたのです。

③日米修好通商条約締結（1858年安政5）より薩長連合の盟約（1866年（慶応2））以前まで

筆頭老中に着任した老中井伊直弼は、日米修好通商条約を勅許が下りないまま調印してしまいます。（1858年6月19日、維新の10年前）

家定将軍（7月6日死没）の後継を紀伊徳川家の松平家茂（14代）に決めてしまいます。

オランダ、ロシア、英国、フランスとも修好通商条約を結びます。（同年9月6日）

これには、開国反対の尊王攘夷の水戸の斉昭一派や尊王派の学者たちも猛反発し、全国の尊王攘夷の志士の行動を活発化させました。

更に家定の後継に一橋慶喜を考えていた福井の藩主松平春嶽や土佐の藩主山内容堂等の有力大名は井伊直弼に反発しました。

幕閣に反発するこれらの動きを制するために井伊直弼は有力大名の側近の論客や浪士を逮捕拘禁しました。（福井藩橋本左内、長州藩吉田松陰等が死罪）

更に、有力諸侯の水戸の徳川斉昭、その息子徳川慶喜、土佐の山内容堂、福井の松平春嶽や有力公卿も謹慎処分としました。

これを安政の大獄と称しています。（1858～59）

井伊直弼は老中政治を復活させたのです。老中は本来絶対の権限者です。老中に対して朝廷も大名も、まして陪臣が意見を言うなどもっての外です。全て処罰の対象です。

以前の政治に戻そうとしたのです。

しかしご存知あの桜田門外で水戸の尊王攘夷の志士等によって暗殺されてしまいます。(桜田門外の変 1860年(万延元)、維新の8年前)

幕閣は開国推進への強力なリーダーを失いましたが、しかしもう開国への政策を変える訳には行きません。

この間徳川斉昭は死没(1860年8月)しましたが、幕閣は松平春嶽、山内容堂、一橋慶喜の謹慎を解き、幕府は体制を強化し、一丸となって開国と海防の政策を進めようとなりました。

桜田門外の変あたりから尊皇攘夷運動は水戸と長州で勢いが出てきます。両藩は藩をあげて尊王攘夷派です。特に長州は京都で朝廷の多くの公家を取り込み攘夷派にしていきました。

又、これに扇動されて全国の攘夷思想の脱藩浪士が京都の集まり、尊攘運動を行います。(ほとんどの大名とその家臣は幕府に従って開国派はですので、藩内では攘夷運動が出来ないので、長州が仕切っている京に出てきます)

その頃の京都の朝廷は長州の攘夷論で支配されていたのです。

幕府は 松平春嶽を政治総裁、一橋慶喜を将軍後見職とします。(1862年)

朝廷は長州の尊王攘夷派の扇動で政治力を持ち始め、開国を認めません。

幕府はもう朝廷を無視できません。後見職一橋慶喜と将軍家茂が上洛します(1863年1月、3月)

朝廷の攘夷派(開国反対派)を一掃する必要があります。

幕府は、会津の松平容保を京都守護職に任命し、朝廷の開国政策への転換を図ると共に京都での長州の志士を主体とする尊王攘夷志士の壊滅を実行します。

薩摩の島津久光は自藩の攘夷派を伏見寺田屋で討ちます(寺田屋事件1862年)。

土佐の山内容堂も自藩の尊王攘夷派の武市瑞山を投獄します。後に処刑。

朝廷の尊皇攘夷派と結びついていた長州を、会津と薩摩が宮中から一掃します。(文久3年8月18日の政変 1863年、維新の5年前)

幕府と朝廷は公武合体路線を進もうとします。

京都での幕府の攘夷志士壊滅対策は新撰組があたります。新撰組が長州の志士を襲う池田屋事件（1864年6月）が起こります。

長州の志士の多くが殺されます。

文久の政変と池田屋事件で長州（全国尊攘派の主体）は京都での反幕府運動が大きく後退します。

そこで起死回生を狙って長州は京都に出兵しますが、しかし薩摩、会津、桑名、土佐の幕府軍連合軍に敗れます（禁門の変（蛤御門の変）1864年（元治元）7月19日、維新の4年前）

この長州の京への出兵は討幕ではありません。朝廷での攘夷派長州の地盤回復をねらっての武力行使です。

ところで、攘夷のもう一つの急先鋒であった水戸藩は、尊王攘夷論の理論を作ってきた会沢正志斎は1862年（文久2）「時務策」を発表して攘夷論（鎖国）から開国論に変心しました。尊王攘夷論で全国の尊王攘夷志士をたきつけたご本尊が宗旨替えをしてしまったのです。鎖国がもはや現実的な政策でないことが分かったのです。

攘夷論者の徳川斉昭も1860年に死没しています。生きていたら攘夷論者の斉昭は何と言ったでしょうね。しかし水戸の人々全てが急に考えを変えられません。開国派と攘夷派（鎖国派）に分かれてしまいきます。攘夷派は天狗党として活動し幕府に鎮圧されてしまいます。

水戸以外の尊攘の志士は、このことを知ってか知らずか、開国派へとはなかなか変わりません。

長州も水戸が変わったからと言って攘夷から開国に変えません。

話は戻って長州ですが、水戸が開国派になっても上記のように京都で攘夷の騒動を起こし、長州は日本国内で孤立してしまいます。

しかるところに長州は禁門の変の直後に英・米・仏・蘭ともめ、その4国連合艦隊に下関を砲撃され、対戦し、敗れます（1864年8月5日）。明治維新の4年前です。

講和は行われますが、これによって長州は西洋の軍事力を目の当たりに見て、自分たちが相当遅れていることを肌で感じ、幹部たちはショックでした。

幕府は1864年11月長州征討を行い、長州の謝罪で一旦兵を引きますが、許しません。

4 国連合艦隊の砲撃、敗退で長州の攘夷派の幹部たちがいっぺんに開国派に変心、転向してしまいます。

柔軟と言おうか変わり身が早いと言おうか、これまでが西洋の科学技術の程度について無知であったのか、とにもかくにもかの有名な攘夷派の桂小五郎（木戸孝允）、井上馨、高杉晋作、伊藤博文を初め藩の幹部は開国派になります。

長州はこれまで全般的には攘夷派の志士たちによる政権だったと言えるのですが、長州にも開国派はいました。長井雅楽と言う人で航海遠路策（海外進出論）を打ちだし、藩主からも信頼を得ていたのですが、藩内の攘夷派により失脚しました。（1862年）

それはさて置き、下級の攘夷志士は攘夷思想を簡単には変えられません。

長州は、幕府と戦わねばなりません。西洋からグレードの高い武器が欲しいのですが、幕府への遠慮があつて海外の国も他藩も売りません。

ここで坂本竜馬の登場です。

この人のことは歴史上あまり語られなかったのですが、司馬遼太郎の小説「竜馬がゆく」（昭和37から41年にかけての産経新聞に連載された新聞小説で、後に単行本になりました）が世に出まして、竜馬の歴史的な存在価値が見直されたのです。

竜馬については後述します。

この竜馬（亀山社中）が幕府側の薩摩の西郷隆盛を口説いて、外国から薩摩経由での長州の武器購入を斡旋したのです。（1865年7月21日）

竜馬が薩摩をどう口説いたのか、ここで薩摩と長州は急接近します。禁門変が1864年7月、同年8月の四国艦隊の長州攻撃、同年11月の幕府の長州征討で全て長州は敗北します。

この後長州は開国派に転身します。しかし長州は内外から孤立しています。

そして1865年7月に長州は竜馬の斡旋による薩摩の西郷の好意（薩摩経由武器購入）をうけます。（維新の2年半前）

もちろんその当時、幕府はこの薩摩の利敵行為を少しも知りません。

薩摩は外様ですが幕府の実質中枢です。幕末期常に幕府の味方で、長州と対立してきました。これが何を意味するのか。次の展開で分かります。

④薩長連合の盟約（1866年（慶応2））より鳥羽伏見の戦い（1868年（明治元））まで

武器斡旋の翌年の1866年（慶応2）の1月21日に同じく坂本竜馬の斡旋で薩長連合の盟約が整います（維新の2年前）。薩摩はこれまでの幕府味方を止めて長州と組むことにしたのです。密約です、幕府首脳は知りません。

この時点ではこの盟約は幕藩体制を倒し、王政復古の約束までには至っていません。幕長戦争になれば「薩摩は長州に味方する、長州の朝廷での復権を認める」との内容どまりです。

この密約連合が後の武力討幕に結びつくもので、内容についても竜馬が保証するもので、竜馬の存在は非常に重要であると言えます。

密約に基づき薩摩は幕府に長州征伐を止めようと言い出します。薩摩に言われては幕府も止めざるを得ません。幕府は本当に薩摩を頼りに思っていました。

家茂は死没（1866年7月20日）し、将軍後見役として実質将軍であった一橋慶喜が15代将軍に就任します。（1867年10月15日大政奉還、翌年明治維新）

攘夷が国是と信じていた孝明天皇は周囲の廷臣が開国に変る中でその思想を変えることなく、1866年12月25日崩御されます。

大坂開港に反対され、勅諭が下りず、各国には約束しているし、既に開国派に転身している側近の三条実美、岩倉具視等は天皇説得に苦心していた矢先に突然亡くなりました。

この時期で攘夷派（開国反対）は孝明天皇と開国を理解できない脱藩浪士と一部の底辺の長州志士でしょう。

朝廷の廷臣と幕府関係者は困っていました。

これは逸話です。孝明天皇は痘瘡にかかりましたが、回復に向い、床上げをしようとした矢先に急転して亡くなってしまったのです。

毒殺説があり、側近の岩倉具視犯人説が今もあります。あの五百円札の人です。

幕府の支配統制力の低下は、アメリカ公使ハリスの来航で、開港について諸藩主に意見を伺うところで如実に実態を表わしました。その後の

井伊直弼の老中政治復活も暗殺で潰え、幕府は朝廷、雄藩諸侯と合議しなければ決定が出来ません。朝廷廷臣もその後攘夷から開国に変わりました。この頃には朝廷側と幕府側とでは公武合体で話が進んでいました。幕府からは一橋慶喜、有力諸侯からは山内容堂、松平春嶽、伊達宗城、松平容保、島津久光が参画します。有力諸侯は朝廷の政治参与でもあります。

「公武合体」の話し合いは進み、更に「公儀政体論」に移ります。これは朝廷、大名、幕府で議院を作り政治を行うとの考え方です。

この公儀政体論が話し合われていた頃、薩摩の西郷、大久保、小松帯刀は土佐の後藤象二郎そして坂本竜馬は、この議論を進め、幕府の「大政奉還」にもって行くことにします（薩土盟約 1867年（慶応3）6月22日）。

山内容堂も承認し、容堂は大政奉還の建白書を幕府に提出します。（同年10月3日）

一方薩摩の西郷は、土佐の板垣退助と討幕挙兵の密約を交わし（同年5月21日）更に長州とも武力「討幕」の密約を交わします（同年9月18日）

西郷や大久保が討幕の考えを持ったのはいつであるのか分かりません。元々そうだったのかもしれませんが。

この時点ではこの武力「討幕」の密約は土佐の山内容堂も薩摩の島津久光も知りません。

慶喜将軍は「大政奉還」を乞い、勅許がおります。（同年10月15日）

そして同年12月9日に王政復古の大号令がなされます。幕府廃止、新政府の樹立です。

ところが同年10月13日に薩摩の西郷等が図り、その結果、討幕の密勅が薩摩に下っていたのです。

朝廷では今後の新政府運営について関係者で議論（小御所会議 12月9日）がなされる中で薩摩の大久保利通（久光の代理出席）から慶喜に納地（徳川本家の直轄地）の返還が求められました。慶喜も驚いたでしょう。

土佐の山内容堂や越前の松平春嶽から猛烈な反対意見がでます。「幕府廃止でも一般の大名は領地を返還せず、何故徳川本家だけが領地を返還しなければならないのか。」

しかし西郷隆盛は会議場の外の御所内にいたのですが、強引に可決してしまえと指図し、徳川本家の領地返還を強引に可決してしまいます。（同

年12月9日)

12月25日、慶喜は二条城を退去して大坂城に移ります。

年明けて翌年1868年1月3日(慶応4年、明治は旧暦9月8日より)幕府軍は京都奪還のため大坂より進軍し、薩長軍は鳥羽・伏見で迎え撃ちます。慶喜は西郷と大久保の挑発に乗ってしまいました。そして敗退します。(鳥羽伏見の戦い)。

しかし幕府軍はまだ勢力を大坂で温存しており、幹部は慶喜に攻撃を求めます。

しかし慶喜は天皇を薩長に奪われ、賊軍になることを回避するため、戦争続行をあきらめます。

慶喜は松平容保と共に1月6日大坂城を脱出して12日に江戸に到着となります。1月7日には新政府は徳川慶喜征討令を発します。

1月19日仏公使ロッシュは慶喜に再挙を勧めますが慶喜は拒絶しました。

もしここで慶喜がフランスに支援を求めますと、薩摩は仲の良いイギリスに支援を求め、交戦となります。どちらが勝っても終戦後、フランス又イギリスは権益を要求しますので日本の真の独立が脅かされます。中南米の各国がスペインに国を略奪されたのは、その国の内紛のどちらかに味方して勝利後に支配権を奪取してしまったからです。数少ない兵で国を略奪する方法です。

慶喜は江戸城を出て、上野寛永寺に蟄居し更に水戸に退隠することで許しを求めます。

4月11日、勝海舟と西郷隆盛の話し合いで江戸城は3月13日無血開城しました。

その後幕府の家臣の子弟を中心とする幕軍が結成され、薩長軍に上野で反抗しますが、鎮圧されてしまいます。(上野の彰義隊の反乱 5月15日)

官軍は会津若松城を攻撃し、会津藩は戦闘後全面降伏します。(会津戦争 9月22日)

これが尊王攘夷—尊王開国—公武合体—公儀政体—大政奉還—武力討幕—王政復古—明治維新のストーリーです。

大政奉還は、形の上では幕府の一橋慶喜、松平春嶽、山内容堂、薩摩の西郷・大久保や朝廷側と穏便に話しあいで決まりました。

しかし薩摩の西郷・大久保、長州、土佐の後藤象二郎・板垣退助は、密約で武力討幕を目論んでおり、王政復古と称して徳川本家の領地を取り上げ、慶喜の官位を取り上げ、幕府を挑発し、立ち上げさせてから討ったのです。

西郷や大久保は主君の島津久光に、土佐の後藤象二郎は主君の山内容堂に承認を得ておりません。

もうこの時期、土佐の後藤象二郎や長州の桂小五郎等も含めて家臣達は主君にうそを言い、承認を得ないままに動き回ります。

この幕末最終時期は、大名の有力家臣が藩をリードする時に入っていました。実質権限をもってしまったのです。いやそれ以前からほとんどの藩は重臣たちによって執政がなされていました。

徳川幕藩体制の崩壊は始まっていたのです。

鳥羽伏見の戦いから始まり明治2年まで続く戊辰戦争は大名の家臣たちの戦争です。

薩摩の島津久光も土佐の山内容堂も藩の兵を動かすことを追認せざるを得なかったのです。

西郷は久光に徳川幕府を倒した後の将軍は久光様ですと言って、藩の兵を京都に進軍させる承認を得たそうです。

西郷にはそのつもりはありません。明治維新になって久光は西郷に自分がだまされた事に気づき東京から鹿児島に帰り、西郷をなじったそうです。

(司馬遼太郎の話)

(3) 幕末の決着の妙

① 維新政府の処罰

戊申戦争で一時的に幕府に反抗した奥羽の諸藩も戦争後一時謹慎を受けた大名はありますが、切腹の責任を取らされた大名はいません。慶喜、会津の松平容保を初め幕府側の大名はみんな許されます。

旗本もほとんど許されるのですが、討幕前の勘定奉行、陸軍奉行並であった小栗上野介は処刑されました。小栗は幕府の長州征伐の主戦論者で聞こえており、長州が許さなかったとのこと。幕臣榎本武揚は五稜郭で反乱したにもかかわらず許されています。

又新撰組の近藤勇も捕縛され処刑されましたが、これも京都で多くの長州の志士を斬ったことへの報復と見られています。近藤勇は大政奉還後ではありますが、若年寄格になっており、一応大名格ですので、本来から言えば処刑はないはずなのですが、長州の恨みは二人に対してだけは許しがたかったのでしょう。

②賢侯と家臣の関係

倒幕派も、幕府派も大名は明治政府の中枢には参画しません。一時的に役職についた島津久光や山内容堂、松平春嶽等はいますが、直ぐに退きます。中枢はみんな薩長土肥の大名の家臣と公家で構成します。

これから見ても幕末賢侯と言われた山内容堂（土佐藩主）、松平春嶽（福井藩主）、島津久光（薩摩）、等は公武合体、大政奉還の政治的な動きの中では主要なキャストではありましたが、最終的に大名の家臣たちの武力討幕に対しては彼らに押し流されてしまいます。

彼等がいつ武力討幕を考えたかははっきりしませんが、はっきり実行に移したのは1867年（慶応3、維新の前年）5月の薩摩の西郷・小松と土佐の板垣の密約そして9月の薩摩と長州との密約です。

土佐の山内容堂は家臣の勝手な動きを知らなかったし、福井の松平春嶽もこの動きを知らなかったのです。

関係者間では表向きは円満に徳川から朝廷への大政奉還で議論されていました。

しかし薩摩と長州の武力討幕の動きは10月ごろからうわさにあがっており、薩摩が京都に派兵しました。円満な大政奉還のことなど無視です。

そして12月9日の最後の関係者による話し合いは、会津、桑名の徳川の兵は御所から追われ、薩摩の兵が御所を仕切る中で会議が開かれました。その結果は上述通りです。

皆大名の家臣たちが、公家をたらしこんで明治維新政府を樹立したのです。

幕末、ほとんどのお殿様たちは藩の主人（オーナー）ではありますが実権は家臣に握られていました。賢侯言われたお殿様ですら家臣にだまされていたのです。

江戸時代も中期になりますと、藩の経営は財政難となり、借金が膨らみ、そこへ飢饉で農民の一揆、騒動が起こります。幕府は藩行政の失態を許しません。

殿様は重臣（家老達）に幕府への言い訳交渉や、藩内の行政を任せてしまいます。藩の実権は重臣たちに移ります。

もし実権を取り戻したいと思う殿様が現れたら、重臣たちは隠居を勧め、いやと言えど殿様の失態をでっち上げ強制的に蟄居させます。それでも抵抗する殿様には“おくすり”を盛る方法もあります。

まれにお家騒動になりますが、幕府には家老がうまく報告してケリを付けます。

普通のお殿様はもちろんこのストーリーは知っていますので、重臣に反抗しません。命が危なくなるのですから。

ここで維新のこぼれ話です。

明治の初めに、某新聞社の記者が有名な長州のお殿様毛利敬親（たかちか）侯にインタビューに行きました。当時のあだ名を「そうせい侯」と言われていました。

記者「お殿様、幕末長州では勤王攘夷派と佐幕派が争い、政権がくるくる変わりました。その時殿様はどのように家臣へ意見や指図をされましたか」

毛利侯曰く「政権が変り尊王攘夷で行きますと言われれば“そうせい”と言ひ、政権が変り佐幕派になって“徳川に恭順する”と言われれば“そうせい”と言ひました。もし反対意見を述べていたら今日ここにいなかったでしょう。」（家臣に殺されていた意味）

この時代、毛利侯だけでなく殿様がすべてこの思いだったでしょう。

この実態から言つて朝敵だから言つて大名に責任を取らせるわけには行きません。まして自分の意思で動いた将軍徳川慶喜を許したのですから。

（4）不思議の人「坂本竜馬」

司馬遼太郎が「竜馬がゆく」を著すまで多くの方は、竜馬は良くわからない幕末の浪士としか思わないのが普通でした。

しかしこの人の幕末の活躍は今や正史に載っています。竜馬は、最後は近江屋という京都の隠れ家で暗殺されます。

この人のことを書いた本はその後多く出版されました。2010年NHK大河ドラマ「竜馬伝」でも放映されました。しかしここで史実としての彼の人はどんな考えの人で、どのような立場の人であったのかをまとめてみます。

竜馬はペリー来航（1853年）の後、約束もなく勝海舟に会いに行きます。時期はもう少し後だったかもしれませんが。小説の「竜馬がゆく」では開国派の勝を訪ねて、返答次第では切り殺すつもりであったとのことでした。

そうです。ペリー来航時は日本人のほとんどの人が攘夷思想でありましたように竜馬もこちこちの攘夷派（開国反対派）でした。しかし勝の説明で開国派に転身します。そして勝の弟子になります。

勝とのもう一つの出会いは勝が神戸で設立した海軍塾（1864年）に竜馬が入校して、勝の弟子として教えを受けます。これははっきりしています。最初の出会いはどっちか先か、又それ以外の時なのか分かりませんが、土佐の脱藩浪士の竜馬は勝にその才能を可愛がられ、竜馬も勝を尊敬していました。

竜馬は出身藩の土佐で尊王攘夷派の武市瑞山とはもともと親しく、長州の桂小五郎等とも竜馬が開国派でありながら親しいのです。江戸で剣道修行中に知り合い、仲良くなったようです。

薩摩の西郷隆盛とは勝海舟の紹介で親しく交際します。西郷は開国派です。

竜馬自身は勝の海運塾閉鎖後は、長崎に「亀山社中」後の「海援隊」「を設立して海運、商社活動を行います。

この亀山社中（海援隊）は私的な団体で、最初は薩摩がスポンサーで、後に土佐もスポンサーになり、更に松平春嶽（福井藩）も竜馬を気に入り支援者なっています。

このように竜馬は、開国派の名士も攘夷派の名士にも愛される中で、公武合体、大政奉還を目論む船中八策（1867年6月）を土佐の後藤象二郎に出し、これを山内容堂が受け入れ、容堂が慶喜将軍を説得したものです。

これより上述しましたように従来よりの開国派の薩摩と、攘夷から開国派にようやく変わった長州（1864年、四国艦隊に下関を砲撃されて開国派に変わる）との間を、劇的な薩長同盟を結ばせたのは竜馬です。

薩摩と長州は犬猿の仲でした。それは、薩摩は幕府と同じ開国派で、幕末の幕府をバックアップしてきた主要な藩で、幕府と行動を常に共にして来ました。（島津^{なりあきら}斉彬、久光）

一方、長州は攘夷派で、京都の朝廷を抱き込んで幕府に反抗します。長州は薩摩と幕府との協同により、京都から追われ、禁門の変では薩摩の兵

に壊滅させられます。長州の薩摩への恨みは大変なものでした。

竜馬は、この恨みを捨てさせ、新生日本誕生の為には両藩が仲直りすることが必須であることを説いて、同盟が整ったのです。長州は四国連合艦隊に敗れ、攘夷思想を捨て開国派に変わっていましたので、この問題は無くなっていました。

竜馬が作った大政奉還の要領「船中八策」は徳川家のことも配慮しており、この提案を受けた幕府から怨まれることはないはずでした。

しかし竜馬は京都で暗殺されました。誰にでしょう。当初は新撰組説がありましたが、幕府管轄の京都見廻組であったことが明治になって分かりました。京都見廻組は新撰組と京都を二分して治安警察的な役割をしていました。

当時竜馬は。攘夷の浪士から開国派として狙われ、幕府側の新撰組や見廻組から幕府に逆らう不逞の輩として狙われていたのです。

薩摩、長州、そして幕府の勝海舟や松平春嶽と親しく交際していたにも関わらず、慶喜や松平容保には彼の政治的な位置が分らなかったのです。

暗殺される前に京都にいた幕府大目付（幕閣）とも話し合いをもっていました。そんなことは見廻組は知りません。

西郷、桂小五郎や既に脱藩の罪を許されていた土佐藩より、町の中で泊まるのは危ないから自分たちの藩邸で泊まるように言われていましたが、藩邸は出入りが不自由だとして、どの藩邸に泊まらなかったのです。

京都にいた慶喜将軍は竜馬が名士であることは知っていましたが、彼の考えが今一つ分かりませんでした。

竜馬が暗殺されてから、直ぐに竜馬の考え方（公武合体、船中八策）を聞き、しまった新撰組を止めておけば良かったと言われたそうです。これは司馬遼太郎氏の話です。

更に付け加えれば竜馬が生きていれば徳川家本家は、大政奉還後も政治の中枢として存続していた可能性が強いのです。

竜馬は武力討幕を主張していません。あくまでも朝廷、徳川本家、大名との公武合体です。

西郷隆盛が押し付けた徳川本家の直轄領の返還は、竜馬生きていたら幕府に要求出来なかったでしょう。

そうすると慶喜は立ち上がり、西郷等は武力討幕に向えなかったでしょう。

西郷等は公武合体ではありません。あくまでも幕府（徳川本家）を武力

で滅亡させ、新しい政府を樹立させるのが目論みです。

西郷は竜馬が生きていたらこの武力討幕をどう竜馬に説明して納得させたのでしょうか。竜馬説得は大変難しい話です。竜馬は薩摩、長州、土佐の家臣と幕府側の勝海舟、山内容堂、松平春嶽の考え方と位置を考えて平和裏に大政奉還（船中八策）を提案しました。

しかし西郷等は内々で武力討幕を打ち合わせていました。竜馬説得は同じく土佐出身で陸援隊の中岡慎太郎が京の近江屋で行っていたところを襲われたようです。

竜馬はここで殺されましたので西郷等は竜馬に遠慮はいりません。

ここから坂本竜馬暗殺は西郷隆盛説が出ましたが、今日は見廻組暗殺説が主流だと思います。（暗殺者の自白）

坂本竜馬は出身の土佐藩（藩主山内容堂）より脱藩の罪で捕縛の恐れ、長州等の尊王攘夷の志士から襲われる危険、同じ開国派の幕府からも反幕府の不逞の浪士として襲われる危険の立場の中で、日本の立ちいく先は公武合体と開国、海運の振興であるとの信念をもって活動します。

竜馬の考えは、薩摩の西郷隆盛、長州の桂小五郎を結び付け、土佐の後藤象二郎が賛同し藩主山内容堂もついに脱藩の罪を許し、幕府も考えに賛同し、円満に大政奉還の道筋をつけたのです。

竜馬は特に学問で聞こえた訳でもなく、一介の脱藩浪人に過ぎません。しかし会った人は幕末の名士も志士も大変高い評価をします。

幕末に、藩の後ろ盾を持たず、孤軍奮闘で関係者間を駆け回り政治権力を一つにまとめ上げましたが、武力討幕を知らずに亡くなりました。

新しい政府ができて自分も役職につかないで海運、商社活動やると言明していたそうですが、西郷と、桂は竜馬が生きていたらこの恩義に報いるためにどう処遇したでしょうね。

竜馬を暗殺した見廻り組の連中は竜馬の立つ位置を知らなかったのです。幕府に刃向う不逞の浪士との認識だったのでしょうか。明治に入って竜馬の活動を知り、茫然としたとの事です。慶喜は竜馬を殺してはならないと指示して置かなかつた事を悔やまれたそうです。

竜馬が生きていたら徳川本家の処遇は西郷の言いなりにならなかつたので、鳥羽伏見の戦いはなく、慶喜は逆賊にはならなかつたでしょう。

(5) 至誠の学者吉田松陰

幕末の長州の人、吉田松陰の名を聞いた事がない人はいないでしょう。幕末に多くの有名人が現れます。一人一人が歴史物語になります。

幕府側も反幕府側もそれぞれ攘夷、開国、尊王（勤王）、幕藩体制維持（従来の老中政治）公武合体、大政奉還、王政復古を標榜します。当然武力討幕は反幕府側だけです。

しかし幕末の政治関係者で、一貫して同じ主張をした人はいません。幕末15年の間に主張が変わるのです。

例えば長州の桂小五郎、高杉晋作や伊藤俊輔なども最初は攘夷思想でありましたが、4カ国連合艦隊の長州攻撃（1864年）後に開国思想に転身しました。水戸の攘夷派も開国に変わりました（そのまま攘夷派もいました）。

幕府も老中政治をやめ公武合体から大政奉還に変わり、当初幕府派の薩摩は尊王開国、公武合体から討幕へ、長州も薩摩と連合しては討幕派となります。

幕末最後まで攘夷思想をすてなつたのは孝明天皇と脱藩の数少なくなつた攘夷志士達だけです。孝明天皇は明治維新の1年前に亡くなり、この攘夷志士たちは明治御一新で霧散してしまいました。

このような思想の流れの中で反対派により、暗殺、斬殺、打ち首、切腹、戦死で亡くなる人があり、生き残った人が明治政府を樹立したのです。

さて吉田寅次郎松陰ですが、この人の実家は杉家で吉田家に養子に行つて吉田姓を名乗っています。両家とも長州藩の下級の武士ですが、学者として藩主にも覚えめでたい家でした。彼を学者として仕込んだ叔父の玉木文之進も長州藩で有名な学者です。いわゆるアカデミックな一族なのです。

松陰は叔父の特訓教育もありましたが極めて優秀で、11歳の時に藩主毛利慶親（敬親）に兵学の御進講をしています。松陰が並大抵の優秀さでないことは藩内で知らぬものはいません。

兵学が専門であるので外国船が来航する当時の世情からして、海防には大変関心がありました。根柢の思想は尊王攘夷です。尊王も攘夷もペリーが来航前は日本国みんなそうでした。

しかしペリーの来航で、幕府老中は日米和親条約（1854年）、日米修好通商条約（1858年）を結びます。

吉田松陰は攘夷派として幕府（大老井伊直弼）の開国政策に反対します。

そして老中間部詮勝の暗殺を計画します。これが露見して死罪（1859年10月27日）になります。

時の政府の閣僚へのテロ行為計画ですから露見すれば死罪は当然でしょう。

しかし何故そこまでして優秀な松陰が攘夷を主張して、開国派を打倒したかったのでしょうか。

これについて著者の推測を交えながら語ります。

当時確かに水戸や長州を中心にそして彼らに影響を受けた孝明天皇、公家や脱藩浪士が強く攘夷（開国反対）を主張しました。

しかし開国派は幕府の老中や勝海舟等幕府要人だけでなく賢侯と言われた藩主薩摩斉彬、松平春嶽、山内容堂、伊達宗城（むねなり）等もいました。

開国派がなぜ開国を主張したかです。一つは西洋の科学技術と工業力の高さへの認識、もう一つは西洋諸国の政治戦略への対応のためと言えます。

西洋の科学技術の高さは日本をはるかに上回っている。銃、大砲、軍艦、溶鉱炉等々開国しなければ追いつくことが出来ないことを強く認識し、又政治的にはイギリス、アメリカ、フランス、ロシア等西洋有力国は一枚岩ではないが、もし連合されれば日本は一たまりもない。政治的に友好関係を結ぶ必要がある。

この認識が開国路線に踏み進んだものと考えます。

しかし松陰はここをどう考えたかです。

松陰は佐久間象山について洋学も学びましたが、学問の基本は漢学（儒教等）と国学です。これは尊皇攘夷の発祥と言われる水戸学派に近いと思われます。

西洋の科学技術への認識が全くなかったわけではなく、西洋事情を知るためペリーの二度目の来航の時に密航を企てて失敗します。

松陰は西洋の科学技術への認識はあっても、その差の大きさへの認識が乏しかったと思います。

学べば直ぐに追いつくとの認識だったのです。実にそんな生やさしい技術差ではなかったのです。

日本は維新36年後の日露戦争（1904年）の折でも三笠を初め主力艦のほとんどは未だ自国で建造出来る技術がなく、英国からの輸入艦に頼りました。

もし松陰が密航に成功していれば、アメリカやヨーロッパの科学技術、工

業力を見て彼の考えは180度変わったでしょう。

後年長州の井上聞多や伊藤俊輔等がロンドンに密航します。(1863年5月)

これにより留学組(密航)は西洋の科学技術の高さを知り、日本が一朝一夕で追いつくことの難しさを認識し、開国に転身しました。

松陰も実際に見聞し体験すれば開国派に転向したことは間違いないと思います。孝明天皇以外、幕末の人は早かれ遅かれみんな開国派になります。明治になっても鎖国を主張した人はいません。

吉田松陰は攘夷の人であるだけでなく勤王(尊王)の人で、老中政治反対の反幕府思想を持っていました。しかし天皇、徳川幕府、長州藩のラインを崩すつもりはありませんでした。

松陰の尊王は幕府と藩をなくし、天皇と国民直結の政治までは考えていないのです。公武合体の政治を考えていました。

そして吉田松陰の活動時期は幕末ペリー来航の1853年から死罪の1859年の6年間で、この後明治維新(1868年)までの幕末動乱の最重要時期である9年間、即ち幕府と長州の争い、そして討幕にも関係していません。

思想は攘夷で終わっています。

生存中の華々しい活動は物語としては面白いのですが、明治に入って彼の評価が難しかったのはここにあります。しかし明治維新の長州の元勳たちが、昔学んだ松下村塾(しょうかそんじゅく)の吉田松陰先生を懐かしみ、先生を誉めそやしたことから吉田松陰への信仰が始まりました。

更に政府が貧乏な侍の子が偉い学者になったとして、小学校の教科書に勉学の励みの教材に使い松陰は全国区になりました。

吉田家も生家の杉家も豊かではありませんが、食うに困るような家ではありません。父、兄や叔父も代官を務めましたし、私塾松下村塾を開く程度の経済力はありました。

松陰は多彩なその弟子から見て優秀な学者であり、自分の信じた尊王攘夷に純粹な活動家でした。

しかしそれは直ぐに時代遅れの思想となり、いやすでに時代遅れでありました。

決して吉田松陰を誹謗するものではありません。学者でありながら書齋に引きこもらず自ら政治活動をし、学才を藩の上下を問わず認められ、多彩な弟子を輩出したことは幕末革命期の鬼才であったと思われます。自ら「狂夫」(きよ

うふ)とも称しました。」

彼は幕府の取り調べでは、幕府役人は丁寧に接しました。彼は自説を良くしゃべりました。役人は話をよく聞きました。その中で自ら老中間部詮勝暗殺を計画(未遂)したことをしゃべってしまいます。殺されることより自分の主義主張を述べることの方が大事なのです。

死に急ぎと言われ、主義のための自殺行為とも受け取られます。

これが彼が云う「至誠」でしょう。

(6) 会津のその後の事

会津藩は敗戦で藩が縮小させられたため、職を失った藩士の対策として、新政府は青森県の斗南(むつ市)に土地を与え、開拓移住を勧めました。

会津藩士の多くが斗南(青森県むつ市)に移住させられましたが、過酷な地で開拓は難しく、多くの犠牲者がでました。

会津人は新政府を一層怨みました。

明治以降も新政府、特に長州は京都での新撰組への遺恨で会津に恨みがあり会津を痛め続けました。会津人も斗南の事での恨みも大きかったのです。

幕末の怨みあいを長期にわたって引きずることはいかにもまずいと言うことで、やっと昭和に入って明治天皇の孫で昭和天皇の弟である秩父宮殿下の嫁に松平容保の孫である勢津子妃をもらうこと(1928年 昭和3年)で長州と会津は一応仲直りをしたとのこと。

更に後日談があります。幕末ものを多く小説にしている司馬遼太郎が「王城の護衛者」著し、松平容保が孝明天皇にいかに信任を得ていたかを書きました。(1965年)

秩父宮勢津子妃殿下は太平洋戦後になっても、世間に実家の会津松平が逆賊と思われていることを気にされていたのです。この本の出版をみて、会津松平の親戚と共に司馬遼太郎に感謝の意を表明されたそうです。

おわりに

幕末の尊王攘夷の思想がどのようにして起こったかです。当時日本国の国民の皆が攘夷思想でした。鎖国は徳川幕府が行った政策で、それまで海外との往

来を禁じた政権は日本ではありません。

当時の人々はこの幕府の特異な政策を国是で、開闢以来日本は鎖国だと思っ
ていました。

幕閣も自分たち（祖先）が勝手に作った政策である鎖国を止めるのに朝廷に
お伺いを立てました。徳川幕府は政策決定に朝廷にお伺いをたてることなどあ
りませんでした。

結局、反対派皆鎖国を止めて開国に考えになります。それぞれその時期が
違うだけです。

早いのは幕閣や徳川の家来のインテリ（勝海舟等）、遅いのは長州の攘夷の
志士や脱藩浪士たちです。（孝明天皇は最期まで攘夷思想）

この早い、遅いで江戸で、京都で殺し合い起きたのです。

尊王（勤王）についてです。

幕閣も水戸も長州もインテリ学者もみな尊王です。しかし幕府を倒して朝廷
政治を考えた人々は、草莽の尊王志士と言われた一部脱藩浪士以外にはありま
せませんでした

公家も水戸も長州（吉田松陰も）の人々も討幕を表明した人はおりません。

しかし、これが幕末最終で西郷隆盛や桂小五郎等により（薩長同盟）で急浮上
します。そして討幕、明治維新政府の樹立となります。

西郷がいつから討幕を考えていたかは分かりません。

坂本竜馬は討幕を考えていません。幕府と朝廷の公武合体で、家臣団を入れた
議院の設立での政府樹立を考えていました。

竜馬生きていれば、討幕の西郷とはどのように話し合われたでしょうか。西郷
と桂は薩長連合で竜馬に世話になっており、竜馬の考えを無視することは難し
かったでしょう。

まあとにかくこうして明治維新はスタートしたのです。

以上

2016年3月29日

梅 一声

{幕末年表}

- 1751年（宝暦元年） 吉宗死没
- 1770年頃 産業革命
- 1776年 アメリカ13州独立宣言
- 1778年 ロシア船蝦夷地に来て通商を求める
以降ロシア船やイギリス船が日本近海に出没し日本に通商を
を求めるようになる
- 1783（天明3）～1788年（天明8）
天明の大飢饉、天明の打ちこわし（1787年）
以降幕末まで飢饉、一揆、強訴、打ちこわしは絶え間なく起こる
- 1787年（天明7） 松平定信老中筆頭
寛政の改革
荒廃農村の復興、儉約の強制、棄捐令による旗本・
御家人の救済、大政委任論の表明
鎖国の維持（海防体制の構築、海防強化を諸大名に
命じる）
朱子学を官学とする 旗本・御家人子弟の教育
- 1792年（寛政4） ロシア使節大黒屋光大夫を護送して、根室で通商を求
める
- 1793年（寛政5） 老中松平定信辞任
大黒屋光大夫、家斉に謁見
- 1799年（寛政11） 松前藩を幕府直轄地とする
- 1800年（寛政12） 伊能忠敬、蝦夷地を測量
- 1801年（享和元） 幕府、勘定奉行に蝦夷地巡視を命じる
- 1802年（享和2） 蝦夷奉行を設置
- 1803年（享和3） アメリカ船長崎に来航して、貿易を要求
- 1804年（享和4） ロシア使節レザノフ長崎に来て、通商を求める
- 1808年（文化5） 間宮林蔵樺太探検、間宮海峡を発見
- 1808年（文化5） イギリス船長崎入港、長崎奉行松平康英引責自殺
- 1809～17年 オランダ船の入港なし（フランスに併合のため）
- 1812年（文化9） 高田屋嘉兵衛、国後島沖でロシア船に捕えられる
- 1817年（文化14） イギリス船浦賀に来航、貿易を要求
- 1822年（文政5） イギリス船浦賀に入港して、薪水を求める
- 1824年（文政7） イギリス捕鯨船、常陸、薩摩に上陸
- 1825年（文政8） 異国船打払い礼

- 1825年（文政8） 会沢正志齋「新論」成る
- 1828年（文政11） シーボルト事件
- 1834年（天保5） 水野忠邦老中就任
- 1837年（天保8） アメリカ船モリソン号、瓢民を伴い浦賀に入港
大塩平八郎の変
- 1839年（天保10） 蛮社の変（渡辺崋山、高野長英投獄される）
- 1840～42年（天保11～13） アヘン戦争
- 1841年（天保12） 水野忠邦の天保の改革
様式様式軍備起こる
- 1842年（天保13） 打払い令（文政8年）を廃止し、薪水給与令を復活す
- 1843年（天保14） 老中水野忠邦失脚、阿部正弘老中筆頭
- 1844年（天保15） オランダ国王開国進言
- 1846年（弘化3） アメリカ東インド艦隊司令官ビッドル浦賀に来航し、通商を要求
フランスインドシナ艦隊セジュール長崎に来航し、薪水と難破船の救護を要求
デンマーク船相模国鶴ヶ丘沖に来航
- 1849年（嘉永2） アメリカ軍艦プレブル号、長崎に来航、漂流民を受け取り退去
イギリス船マリナー号、浦賀に来航、江戸湾を測量後、下田に入港
- 1850年（嘉永3） オランダ船、長崎に入港し、アメリカの通商要求を伝える
佐賀藩反射炉築造開始
- 1851年（嘉永4） 土佐国漁民中浜万次郎ら、アメリカ船に送られ琉球に上陸
- 1852年（嘉永5） ロシア船漂流民を護送して、下田に来航
オランダの東インド総督の公文書で明年アメリカ使節が来航して開港を要求することを予告
- 1853年（嘉永6） 米使ペリー浦賀来航（軍艦4隻内蒸気船2隻）（6月3～12日）幕府、アメリカ大統領フィルモアの国書受領
家慶死没（6月22日）、13代将軍家定
幕府、国書を朝廷、諸大名、旗本に諮る（7月1日）
幕府、水戸前藩主斉昭を海防問題の参与に任じる（7月3日）
品川台場の築造に着手（安政5年に竣工）

- オランダに軍艦、鉄砲、兵書を注文（9月）
中浜万次郎を幕臣に登用（11月7日）
- 1854年（安政元） 日米和親条約（3月2日）
吉田松陰等下田で密航を企て捕縛される（3月27日）
佐久間象山を連座で投獄（4月6日）
水戸斉昭、日米和親条約に不満で幕府参与を辞任（4月30日）
日章旗を日本国総船印に制定（7月9日）
日英和親条約（8月23日）
日露和親条約（12月21日）
- 1855年（安政2） オランダ王寄贈の観光丸を受領（8月25日）
老中首座に堀田正睦（10月～安政5年6月）、阿部正弘は安政4年まで老中在職）
- 1856年（安政3年） 米総領事ハリス下田駐在（7月21日）
- 1857年（安政4） アメリカ総領事ハリス江戸城登城、通商開始の必要性を解く（10月21日）
家定、諸大名を招集し通商やむを得ない事情を説明（12月29日）
- 1858年（安政5） 井伊直弼大老に就任（4月23日～安政7年）
日米修好通商条約無勅許調印（6月19日）
将軍継嗣を和歌山藩主家茂（14代）に決定（7月5日）
13代家定死没（7月6日）
修好通商条約（日蘭、日露、日英、日仏）
安政の大獄始まる（9月7日）
小浜藩浪士梅田雲浜逮捕（9月）
福井藩士橋本左内拘禁（10月23日）
鹿児島藩士西郷隆盛入水（11月16日）
萩藩吉田松陰再投獄（12月5日）
- 1859年（安政6） 神奈川、長崎、函館3港で露・仏・英・蘭・米との自由貿易を許可（6月）
開港場で大名、旗本、藩士が舶来武器を購入することを許可（6月20日）
徳川斉昭に国許永蟄居（8月27日）
幕府、橋本左内死罪（10月7日）
山内豊信謹慎（10月11日）
吉田松陰死罪（10月27日）

- 1860年（万延元） 咸臨丸でアメリカ渡航のため品川出発、（1月19日、2月26日サンフランシスコ到着、5月6日品川に帰港）
桜田門外の変（井伊直弼暗殺）（3月3日）
批准交換使節新見正興渡米（3月9日サンフランシスコ到着）
斉昭死没（8月15日）
徳川慶喜、松平慶永、山内豊信の謹慎を解く
和宮降嫁（条約破棄が条件）（10月18日）
- 1861年（文久元） 幕府、遣欧使節、開市開港延期交渉のため、イギリス軍艦で出発（福沢諭吉、福地源一郎が随行）（12月22日）
アメリカ南北戦争（1865年まで）
- 1862年（文久2） 坂下門外の変、老中安藤信正、水戸浪士に襲撃され負傷（1月15日）
土佐、吉田東洋、尊攘派の武市瑞山派に暗殺される（4月8日）
老中安藤信正罷免（4月11日）
島津久光、藩兵千人を率いて入京して、幕政改革の意見書を呈出（4月16日）
寺田屋事件、伏見寺田屋で尊攘派の鹿児島藩士有馬新七等、島津久光の命で斬殺される（4月23日）
政治総裁に松平春嶽を任命（7月9日）
朝廷、岩倉具視ら公武合体派公卿を蟄居処分とす。（8月20日）
生麦事件、（8月21日）
会津松平容保を京都守護職に任命（閏8月1日）
朝廷、攘夷を決定（9月21日）
- 1863年（文久3） 将軍後見職慶喜入京（1月5日）
家茂上洛（3月4日）
新撰組京都守護職配下に属す
長州、下関通過の米、仏、蘭軍艦を砲撃（5月12日）
長州井上馨、伊藤博文等イギリスへ密出国（5月12日）
米。仏、長州の砲台を報復攻撃（6月1・5日）
家茂江戸に戻る（6月13日）
薩英戦争（7月2日）
宮中の会津攘夷派を一掃（8月18日）
土佐、武市瑞山を投獄
薩摩、英に賠償金10万ドルを交付

- 朝廷、慶喜、松平容保、松平慶永、山内豊信、伊達宗城に
朝議参予を命じる（12月30日）
- 1864年（元治元）
家茂2回目上洛（1月15日）
蛤御門の変（7月19日）、長州は会津、薩摩、幕府軍に
敗れる
四国艦隊下関砲撃（8月5日）
長州征討、長州謝罪（11月）
- 1865年（慶応元）
家茂、長州再征のため江戸を出発（5月12日）
土佐、武市瑞山等の攘夷派を処刑（閏5月11日）
長州（井上馨・伊藤博文）は海援隊と薩摩の斡旋で長崎グ
ラバー社から鉄砲を購入（7月21日）
横浜製鉄所、横須賀造船所起工
- 1866年（慶応2）
薩長連合の盟約なる（1月18日）坂本竜馬の斡旋
薩摩の大久保利通、幕府に長州征討の非を論じる（4月
14日）
家茂死没（7月20日）、慶喜が将軍就任（12月5日）
長州の再征を解く（9月2日）
孝明天皇死没（12月25日）
- 1867年（慶応3）
土佐、坂本竜馬の亀山社中を土佐の海援隊とし、竜馬を隊
長に任命（4月）
土佐後藤象二郎・坂本竜馬と薩摩大久保利通・西郷隆盛・
小松帯刀と会談し、薩土盟約（大政奉還）を締結（6月
22日）
坂本竜馬「船中八策」を後藤象二郎に示す（6月）
薩摩と長州、討幕を約す（9月18日）
山内豊信、大政奉還の建白書を幕府に提出（10月3日）
討幕の密勅が薩摩に下る（10月13日）
慶喜、大政奉還を乞い、勅許（10月15日）
坂本竜馬、中岡慎太郎、京都近江屋で暗殺される（11月
15日）
王政復古の大号令（12月9日）
幕府廃止、新政府樹立（有栖川宮熾人親王が総裁）
慶喜に辞官、納知を命じる
慶喜、大坂城に移る（12月12日）
旧幕府、江戸城薩摩藩邸を焼き討ち（12月25日）
- 1868年（明治元）
鳥羽伏見の戦い（1月3日）

慶喜大坂城を脱出（1月6日、12日江戸到着）
 新政府慶喜征討命令を発する（1月7日）
 英・米・蘭・仏・伊・晋6国局外中立を宣言（1月25日）
 総裁有栖川宮熾人親王を東征大総督する（2月9日）
 慶喜、江戸城を出て、上野寛永寺に蟄居（2月12日）
 旧幕府陸軍総裁勝海舟と大総督府参謀西郷隆盛と会談し、
 江戸開城に合意（3月13日）
 神仏分離令（廃仏毀釈運動起こる）（3月28日）
 江戸開城、慶喜水戸に退隠（4月11日）
 奥羽越列藩同盟（5月3日）
 新政府軍、上野彰義隊を攻撃（5月15日）
 江戸を東京都改称（7月17日）
 榎本武揚、旧幕府軍艦8隻を奪い、品川を出帆（8月19日）
 官軍、会津若松城を攻撃（8月23日、9月22日会津藩降伏）
 明治と改元（9月8日）
 天皇、東京に到着、江戸城を皇居と定める（10月13日）
 藩治職制を定める（10月28日）
 榎本武揚、五稜郭を本営とする（12月15日）
 ○1869年（明治2） 榎本武揚、五稜郭開城（5月18日）
 版籍奉還（6月17日）
 ○1871年（明治4） 廃藩置県（7月14日）
 岩倉具視・大久保利通・伊藤博文等を欧米に派遣（10月8日）

参考資料

- 幕末史 半藤一利 新潮社 2008
- 日本の時代史20 開国と幕末の動乱 吉川弘文館 2004
- 日本思想体系 水戸学 岩波書店 1973
 - 新論 会沢正志斎
 - 時務策 会沢正志斎
 - 解説 瀬谷義彦 今井宇三郎 尾藤正英
- 国史大辞典 吉川弘文館 1979

- 詳説 日本史 B 石井進等 山川出版社 2005
- 吉田松陰全集 第四巻 山口県教育委員会編纂 1972
- 映画 男はつらいよ 第24作 寅二郎春の夢 原作・監督山田洋二
1979
- 司馬遼太郎作品
竜馬がゆく 世に棲む日々 花神 幕末 王城の護衛者等